

# 備陽史探訪

第35号

発行

備陽史探訪の会  
福山市西深津町7-2-7  
印刷所 塩出印刷

## 歴史を背負うた

### 韓国の旅

立石 雪夫

私は、一九八五年（昭60）と八六年（昭61）の二回に亘り、長い間の念願である韓国への旅を果たす事ができ、何物にもかえ難い喜びを味わった。何れも八、九日間程度の期間で、全日程が彼の地の同門同期の旧友や、彼の地に於ける私のかつての愛する教え子たちの熱い情けに包まれての旅であった。同期の旧友との半世紀ぶりの再会交流については本文では一応割愛し、教え子との交流から得た私の思いを述べて見たいと思う。

私は小学校一年生の途中から二十年近くの歳月を彼の地で過ごした。敗戦で止むを得ず故郷へ引き揚げてから早くも四十年の星霜が流れ、既に老境に達したのであるが、その間多感な青少年期を過ごした彼の地

の山河や人々への、断ち難い懐旧の思いは募るばかりであった。特に少年期を脱したばかりの若さで初めて教員になり、最初に五、六年生を担任し卒業させた七〇名の教え子たちの、その消息を知りたい思いは切なるものがあつた。一九七八年（昭53）、日本での教職生活に終止符を打ち、体も自由になつたので、早速訪韓のための準備をし旅券も用意したが、思わざる個人的な事情が生じ計画は頓挫した。

それから六年後、或る事から私の消息を知った韓国人旧友のC氏が訪日中連絡をくれて、福山で五〇年振りに感激の再会をし、輦で一泊、輦耕三寺、尾道と小旅行しながら遠来の客をもてなし、その後も文通し合つた事が機縁となり、翌一九八五年（昭60）私は韓国在住同期生一同の招待を受け、一〇月、満身喜びに溢れて渡韓したのである。

私は釜山ふ頭で旧友たちの感激の出迎えを受け、南海島、晋州市、釜

山市、慶州市等を回遊する旅行の途次、私の希望で前述の私の初任教

（地名は咸安郡伽倻邑、咸安は往古安羅加羅の地で任那日本府所在云々の地）に立ち寄ってもらつた。校長

さんは不在だったが副校長さん外二、

三名の先生が懇切に応待され、私の名前の記載された五〇年前の職員会議録等も用意されていたのに驚きか

つ恐縮した。日本語のわかる先生が

いないので私の同期生の通訳で会話を交し、伽倻校第一四期生の卒業証

書台帳を全部カメラに写し、用意し

た同校への寄付金を渡して鄭重に謝

辞を述べ、勇躍辞去した。喜ぶべし。

教え子たちの消息を掴む端緒を得た

のである。既にひとりとは即時学校へ

駆けつけて来てくれた。三日後の日

曜日に馬山市で九名、その翌日帰國

の乗船際に釜山ふ頭へ他のふたり

も追い掛けて来てくれた。突然の訪

問にもかゝらず、一二名もの会

たい会いたい教え子との五〇年振り

の再会を果たし、私の生涯最高の感

動の旅となつたのである。

かつての日本人は進出した土地に

必ず桜を植えて神社を建てる。な

かでも馬山市は、鎮海市と共に当時

から有名な桜の名所であつた。その

馬山市は馬山湾の奥にあり、輸出自

由地域もあつて日本企業もかなり進出してきていると思う。馬山湾は、日露

戦争の時バルチック艦隊を迎撃する

ために、東郷艦隊が身を潜めていた

鎮海湾のその奥続きに湾入している。

元寇の時、元軍はこの馬山湾を出撃

基地に用いており、現にこの地の

「蒙古井戸」は今も酒造用水として

使われている。その風光明媚な馬山

湾の汀のさゝやか料亭に、八五年

（昭60）には男女九人、八六年（昭

61）には男女二四人の教え子が、ソ

ウル、釜山、馬山その他から集つて

四・五〇年前同じ青春を過ごした師

弟が、昔の日本語の歌謡などを心ゆ

くまで歌い、韓国料理をさかんに焼

酎を飲み、素朴ではあつても真情を

かたむけ、私をかき抱くようにして

もてなしてくれたのである。

彼ら伽倻小学校第一四期生達は、

小学校卒業時の年令が一四・五才か

ら最高一七才ぐらいであつたのであ

る。其の頃は義務教育施行前だった

ので、就学希望者のうちでできるだけ

年令の高い子どもから一年生に入れ

ていたのである。五、六年生になれ

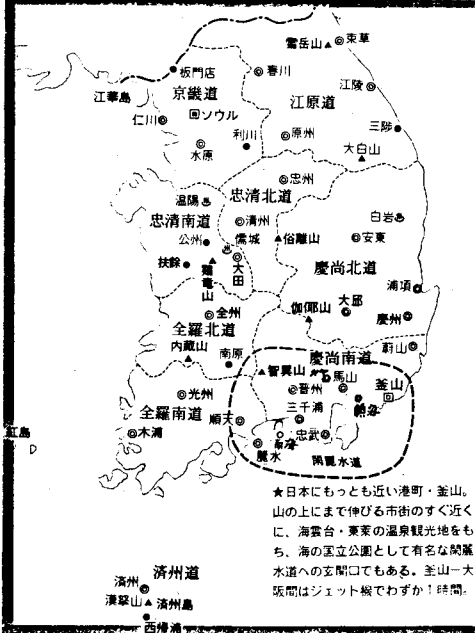
ば年令は既に現在の高校生並みであ

つた。それに対する担任教師の私は

当時僅かに一八才であつた。広い教

室の中の七〇人の学級生達をよくも

# 釜山とその周辺



統一をとり得たものだと思える。軍国主義の横溢した当時の事だから体罰もよくやった。しかし、その体罰も冷静さを失って手を上げたことは一度もない。とにかく七〇人の生徒が皆かわいくてたまらなかつた。とびぬけて手に負えない、したがって一番拳骨を多く食わした子がいたが、今回の訪韓でも一番その子に会いたかつた。ところが既に此の世の人ではなかつた。確認できただけでも一二名の人が他界している。再会した人や文通している人皆

で二八名、所在だけはわかつている人四名、残る二六名は消息不明である。八六年(昭61)に釜山で病床を見舞ったひとりは先月此の世を去つたとの韓国からの死らせを受け確認した死者は一三人となつた。暗然たる思いである。できればそれぞれ墓に詣でたいと思うのだがそれも全部はできないだろう。

彼ら七〇名を卒業させた後、一年余りして私は病氣になり、居を親元の普州に移し退職願いも出し結核療養に専念した。それから彼らとは音

信不通となり、病氣治癒後は私は釜山に出たので彼らと会う事もなかつた。そうこうしているうちに終戦の混乱となつたのである、いつの間にか「立石先生は病氣で死亡」という噂が彼らの間に定着してしまつていたらしい。だから、生きて会えるなどとは疾うの昔に諦めていたところへ、あれから半世紀も経つた今、死んだ筈の恩師が生きていて突然現れたのだから、彼ら彼女ら一様に夢かとばかり驚喜したのであつた。教え子のひとりは、恩師に会えた喜びを七言絶句の漢詩に表現し、揮毫して贈ってくれた。それを私は日本で表装し家宝としている。生活の規範としての儒教精神に基づいて、師を敬い遇する事父祖に見える如くにするという韓国のあり方を私は思い出したのである。しかし、どうもそれだけではないのである。溢れるような喜びと情愛がそこにあるのである。しかし、たとえ師弟間の自然の情愛とはいへ、相手は「憎かるべき日本人」ではないか。しかも往時とは違ひ歴史は大転回し、既に四〇年前に一切の日本人や日本のものを蛇蝎のように悪罵し排除し、日本につながるあらゆる縁を切り捨て去つたのではなかつたのか。その意味からい

えば、私は単なる路傍の人同様に扱われたとしても、或いはもっとひどければ、当時の日帝の手先きだつたとして面罵追及を受けたとしても仕方がないと、覚悟をきめていた私なのだ。しかるに予想に反しこの好遇である。私は彼らの胸の中に、消す事のできない日本へのうっ積したわだかまりがある事を知っているが故に、複雑な思いにかられながらも、彼ら彼女らの差し延べる豊かな情愛の中へ思い切つて身を委ね、勧められるままに盃を重ね、相抱いて踊り相抱いて唄い、そして陶醉していったのである。たまたま結核の大病が徴兵から私を守つたが故に「大君の辺の草産す屍」にも「水漬く屍」にもならず、その結核にもついに死なず、幸せにも今日まで生き長らえて来て、今こそ命ある事の歓びを、こゝ韓国教え子たちに囲まれながらしみじみと思うのであつた。

八五年(昭60)の時には、日程上教え子とは一日だけの宴席であつたが、八六年(昭61)の時は馬山の宴の後更に四日間、教え子の家連れ歩いてもらいとうとう五日間の長丁場となつた。その間、責任者格のKさんは毎日遠くの町から、私の泊っている教え子の女性Aさん宅まで通

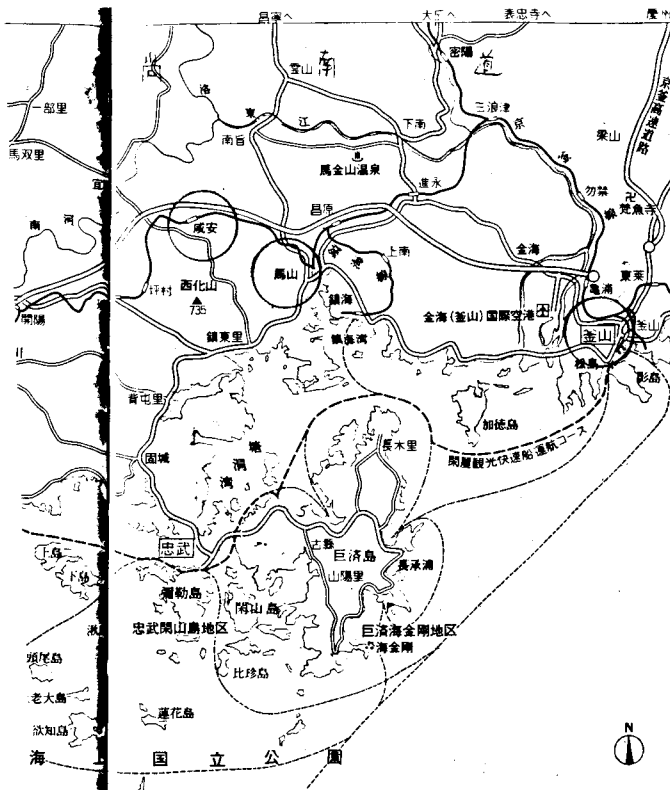
(3)

つてくれ、女性の教え子CさんとKさんは、私の側から昼夜はなれず世話をし、その他の多数の男女も日毎に出入りし、あちこちを案内したり宴席を設けたり、心をこめてもてなしてくれた。教え子の中には、法学博士の学位を持つ韓国一流の法曹や、学校の校長も数人あり、著作家、実業家、官僚、社会教育関係者等いろいろあり、ビルを持ち、大きな総合病院を持つ人などもあるかと思えば、人々もいる。しかし、誰もが一樣に「来年も先生の顔が見たい。是非来て欲しい」と言い、別れの時には女性など皆涙を浮かべて惜別の情をあらわすのを見て「来年も元気で待っていてください。是非来る積りだからね」と堅い握手を別れたのである。彼らから親切にされればされる程、私の心底に重く沈んでいる日本人としての自責の意識が一層鮮明に浮かんで来て、どうしようもない心の痛みを覚えるのである。それは、かつての日本帝国主義が、どんな卑劣な手段を奔して韓国(朝鮮)を侵略したのかもよく知らず、韓国(朝鮮)人がどれ程苛酷な搾取をされ弾圧されてきたかも知らずに、私は、五〇年前彼らの前で教壇に立っていたの

だ。そして荒々しく彼らを叱りながら宮城遙拜をさせ、天照大神を最高神と讃え、彼らの侵略者である当の明治天皇を拜ませ、朝鮮総督が制定した「皇国臣民の誓詞」を毎日唱えさせたりしたのである。朝鮮史は一切教えず、帝国主義的、非科学的な「文部省国史」を教え、「例え太陽が西から出て、アリナレの川が逆さまに流れることがあるとも云々」の嘘八百の神功皇の「三韓征伐」、真実を隠した秀吉の朝鮮侵略など、得意気に教えたであろう当時の己れの姿を想像するのである。韓国合併史をどのように教えたのであろうか。既に記憶は遠く霞んでいられるけれど、当然皇国史観の教科書どおりに熱を込めて教えたにちがいない。今にして思えばまことに忸怩たる思いである。日本人どうしであれば「こらえてくれ、あの時は仕方が無かったんだ」で逃げる事もできるであろう。しかし韓国(朝鮮)人に対しては逃口上は効かない。たとえ教え子たちが、年老いた私に遠慮してあえて難話しないにしても、また私が当時歴史の真実を知らず、無意識的であったとしても、結果として帝国主義の手先であり、加害者としての日本人教師のひとりであった事を免れる事

はできないのである。戦後歴史が解禁となり事実を知れば知る程、海峡の彼方の教え子たちへの重苦しい自責の念が私の身をせめるのである。ましてや、会いたい一念で彼らを訪ね、会えば会ったでなおさらに私の

心を苛むのである。私は彼らに会った時一昨年も昨年も、様々な場面を通して、私の背負うこの心の重荷を率直に訴えたのである。また何回か書信を通じて我が胸の内を披瀝したのである。そうで



なければ彼らにとって見れば、このかつての日本人の「恩師」が、五〇年もの長きに亘って相見なかったが故の「単なる懐しいと思っただけの人間」なのか、或いはそれだけではなくて、その間歴史に学んで変革を遂げ「胸襟を開いて話せる誠実な友人としての日本人」なのかという事は、決定的な評価の別れ目になると思ったからである。私には国家間の外交を動かす力はない。しかし私ら師弟の間だけでも誠実な心が通い合えば、国籍は違おうとも、過去の歴史のこだわりはあろうとも、人間どうしの温かい交情は永く続ける事ができると、そしてそうありたいと願ったからである。幸いにして私の気持ちは教え子たちの心を開いてくれたようである。私も既に齢七〇に近くなる。教え子たちの、かつての紅顔の美少年も、若鮎のような美少女たちも今や六〇の坂を越え、その老残の嘆きを手紙に託して訴えてくる。そして「先生。残りの人生をどうか幸せに長く生きてください。先生の生きていらっしやる限りは必ずず便りを絶やしません」と言ってきてくれる。

この様な庶民どうしの心の交流を積み重ねる努力を続けているところへ、大物や小物の反動政治家達が、あろう事か人の顔を逆撫でにするような異常発言をしてくれる。認識の低い政治家たちには全く困りものである。その度に私も、韓国の知友何十人に詫げ状めいた事情説明や釈明状を出さざるを得なくなる。私を含めて日本国民の多数は、彼らと同じような無思慮な人達でない事を説明するためである。しかしこの様な政治家たちも票さえ貰えば蛙の面に水である。日本の選挙民たちの歴史認識や国際感覚の低さが問題なのである。我が国教育の大きな課題でなく何であろう。

私は韓国への二回の旅を通じて得たものは「我、韓国（朝鮮）を知らず」の認識であった。昔住んでいた事があっても、その間何も学んでいなかったということをつくづく反省させられたのである。韓国（朝鮮）の事を学んでいないという事は、実は日本の事も学んでいないという事にもなるのである。今後日本列島と韓国（朝鮮）半島の歴史を審かにしていく事と同時に、その延長線上にある日本国内に於ける韓国（朝鮮）人の諸問題を一体のものとして捉え認識し行動していく課題がある。これは一個人の課題というよりも日

本人全体の課題であろう。差し当って私は、文祿慶長の役（壬申・丁酉倭乱）を勉強する事と、サハリン問題を調べようと思う。サハリン問題とは、日本政府が第二次大戦中朝鮮人を強制徴用によって当時の樺太へ連行し、非人道的にこき使って置きながら、敗戦後日本人だけは引き揚げて、朝鮮人四万数千人を今日なお置き去りにしているという人道上の問題である。これについて調べ、私にできる事はないかを模索して見たいと思っている。韓国（朝鮮）の事は、私の生涯を通じての重い課題となるであろう。そして同時に私だけの課題ではないと信じるのである。

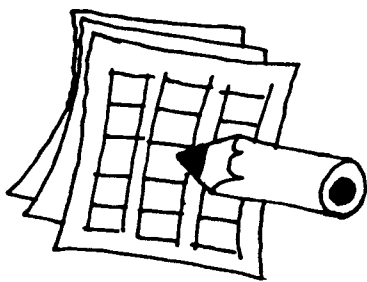
## 田口氏の出版記念 パーティーにご出席して

後藤

四月十五日、福山ワシントンホテルにて備陽史探訪会副会長の田口義之氏が、生涯のライフワークとも云える中世備後の武將と山城の本を出版した。

それを記念して、元福山市長の立石定夫氏、福山城友之会々長の平井隆夫氏、そして探訪の会の神谷会長が発起人となって、パーティーが開か

れた。始めに、ナレーションがはいり、此の度入会した小林良子さんの小鳥のさえずりにも似て甘く、ソフトに本の中から一部を朗読すればムードはいやがうえにも盛り上がり、来賓の村上正名先生等の祝辞があり、最後に田口氏のお礼の言葉と続き、日頃と違つて流石に表情は硬く、清そに装おいをしたピチピチギヤルからの花束贈呈で、やっと笑顔が戻り、花いだ雰囲気の中で飲んで食べれば、ここぞとばかりに城郭研究部会を代表して佐藤錦司氏の詩吟、そしてお粗末ながら私も橋幸夫おけき唄えばから、オリジナナルナンバーと続けば総勢百余名、盛況のうちにパーティーは終了した。



# 先客万来 枝広氏ゆかりの里を 歩いて

後藤

以前より御幸の枝広さんより、大門にある枝広城跡に行つて見たいと云つていたので、四月十二日朝十時に大門駅に待ち合わせをした。

枝広さんの話によると、いつか買った本の中に枝広城のことが書いてあったので興味を覚えたと云つていた。そこで、それでは枝広氏ゆかりの地を歩いて見ようとの話になった。

まず最初に八幡神社境内にある燈ろうと石段から見ていった。この燈ろう、石段については今から二百年程前の天明年間、大門村の枝広氏の家族の者が病氣にかかった。そこで八幡神社に病氣全快を祈願した所その内に病氣が直つた。そこでそのお礼に燈ろうと石段を寄進した。

燈ろうには、天明年間、大門村、枝広甚兵衛と彫つてある。石致については、昭和五十五年神社境内改修工事の為新しく敷き替えたが一部は残つている。

そして、ここから枝広城跡に向かい山頂の本丸跡には馬頭観世音菩薩堂と他に数ヶ所社がある。

そのあと山を下つてその山裾にある古墓群（戦国時代の笠岡大下天神山城主高田河内守とその家臣の墓、伝と真明寺を通つて、お父さんが代まで菩提寺であつた上之坊へ行つた。住職は留守であつたが若奥さんに会つて境内を見させてもらった。ここには神原氏（坪生西山城々主）の供養塔を見て、旧笠岡街道を横道（通称七隠）にある日本廻国二休、一体は文政年間、他の一体は天保年間と書いてあるのを見て昼食を喫茶店で済ませて別れた。

## 城研ニュース No. 6

### 山内首藤氏

### 史跡めぐり開催

### 城郭研究部会

城郭研究部会主催の「中世を読む会」は本年一月より毎月一回の定例会を行ない備後中世史の根本史料『山内首藤家文書』（東大史料編さん所刊）を輪読しているが、このほど同文書の舞台である庄原市周辺の山内氏関係の史跡を臨地に見て廻つた。

四月十九日（日）午前八時 福山駅裏キャッスルホテル前に集合した中世を読む会一行十五名は、四台の

車に分乗、快晴の空のもと一路備北を目指した。十時半庄原市本郷の甲山城跡（県史跡）に到着、中腹の国重文円通寺本堂を見学したのち城跡へ。甲山城は東国から移住した山内首藤通資が鎌倉末に築城したといわれる山内氏の本拠、本丸に登るとさすがに広い。この地で山内氏は「応仁の乱」での東軍方の攻撃、戦国時代の尼子の来攻を受け、そのつど撃退した。本丸部分は塔状に盛り上がり、斜面は絶壁状に落ち込む。臨地ならではの実感であつた。

甲山城跡で昼食を取つた一行は、地毘庄の広大な田野を眺めながら日吉神社へ。この神社は山内氏の崇敬厚く、山内氏の寄進になる国重文の鎧があるという。だが収蔵庫をのぞくとカラのガラスケースが残るのみ「奈良国博へ貸出し中」のハリ紙が我々の期待を無さんにも打ちくだいた。つづいて庄原歴史民俗資料館を見学、帰りに三次風土記の丘に寄つて福山へ到着したのは午後五時であつた。

（中世を読む会）  
毎月第三金曜日 午後六時三〇分  
於 福山市民会館第三会議室

### 利鎌山城跡調査終了

昨年一月より実地調査に取り組んでいた福山市芦田町福田にある中世山城跡「利鎌山城」の測量はこのほど完了した。

五月十日（日）、午前九時 利鎌山城下に集合した城郭部会一行五名（田口、七森、山下、後藤、佐藤錦）快晴の空の下城跡へ。山頂本丸でレール班、平板班に分れ調査開始。二ヶ月振りの山上は若葉がおいしげり見通しは悪く、あまつさえ「ぶよ」の大部分は容赦なく、調査は困難を極めた。だが、一行の目標貫徹の意志は固く、遂に三時半、末端の空堀に達し調査を終えた。

帰り道ではワラビの大群に遭遇というアクシデントもありなかなか充実した楽しい一日であつた。猶、利鎌山城跡の調査は今後室内作業に移り、次号の山城志に発表する予定である。

### 城郭部会事務局

〒720 福山市多治米町九一六

田口義之 方

TEL (〇八四九) 五三一六一五七

### 五月例会

#### 〃御調町史跡めぐり〃 のお知らせ〃

バスツアー  
〃甲奴郡史跡めぐり〃

●期日 五月三十一日(日)

午前八時三十分福山駅裏キ  
ャッスルホテル前集合

●スケジュール 10・00ふれあいの

里(御調の歴史と文化財の  
話)↓10・50刀匠川崎貞行  
氏訪問↓12・15ふれあいの

里(昼食)↓13・10照源寺  
↓13・40町立歴史民俗資料  
館↓14・30本郷平廃寺↓

14・50円光寺↓15・30御調  
ダム↓17・00福山駅(解散)

●講師 住貞義量氏

●会費 二千五百円(貸切バス代等  
実費)

●申し込み先 事務局(神谷方)ま  
で電話かハガキで※定員

(四十五)に達し次第締切  
ります。

●備考 弁当持参 雨天決行  
(事務局)

〒721福山市西深津町七二一七  
神谷和孝方

TEL(〇八四九)二一一三九四〇

### 六月例会予定

バスツアー

〃甲奴郡史跡めぐり〃

◎期日 六月二十一日(日)

※詳細は追ってお知らせします。

#### 備陽史探訪の会機関誌

#### 山城志 第九集発行

九・十世紀の海賊について

下津間康夫

備後の山城(2)

田口義之

― 掠山城 ―

足利一五代將軍義昭 森 紀子

福山城を描きながら 吉田和隆

― 私説福山城 ―

備後の国人 田口義之

― 国人領主制の成立と室町幕府 ―

森の石松のモデル 毛利の石松

森田龍児

開発と文化財保護の両立を

― 文化施設建設に想う ― 村上正名

定価八百円 ※会員の皆さんには一  
冊無料で配布します。

### 歴民研の集い

種本 実

〃天明の一揆〃の研究を基に発足  
した〃歴史民俗研究部会〃を今後幅  
広い民俗研究部会とすることになり  
ました。部会長の梶田氏が御多忙な  
為、私が世話係をさせて頂いたしま  
すのでよろしくお願ひします。今後  
の活動方針についての話し合いを五  
月二十八日午後七時半から市民会館  
第3会議室にて行いますので関心の  
ある方は奮って出席して下さい。  
私は、お寺、お宮を訪ね、文化財に  
接し精神的なやすらぎを得る、忘れ  
ゆく伝説、伝承を掘り起しふる里を  
再発見する……こんな部会にした  
いと考えています。皆様の御意見を  
お聞かせ下さい。

※会計より※  
会費を納めていただいた方には領  
収証を送付しています。領収証の送  
付がない方がいましたら係までお知  
らせ下さい。

種本

### 編集後記

今回は、立石さんの大部の韓国旅  
行記の投稿が、ありましたので、皆  
さん読みごたえがあったことと思  
います。僕自身としても、一度は、日  
本の文化のルーツ韓国へ行きたいと  
思う次第であります。

五月五日の古墳めぐりで次の二名  
の方が会員となりました。

CONFIDENTIAL

備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。

よろしくお願ひします。



画・後藤